校舎

なまはげの里フィロソフィ

菅原 広二（昭和45年卒）

秋高時代

入学してすぐにラグビー部に入った。秋高が初めて花園に出場した年で、30数名もの新入生がおり「紅白戦ができるようになった」と監督が喜んだ。春の大会で初めての秋工戦。試合前の練習で工業の選手は、高々とボールを蹴る、膝が胸に付くほど腿を上げて走る、そして「トライ！」と大きな声を上げて飛び込む。この光景に驚いた。

秋高はまともにキックができる者は1人か2人。トライの練習をしたことがないから、インゴールノックオンする者もいた。ところが試合になると、秋高は強い。スクラムさえ押されなければ、バックスの展開ラグビーで勝てた。私は中学で相撲をやっていたのでスクラムだけは強かった。入部してすぐ、フロントローで正選手になった。

この年、花園に2年連続出場し、1回戦で熊工に圧勝。2回戦強豪大分舞鶴を圧倒した。この時、監督が「相手は前三人に自信があった、それが押せなかったのでリズムが崩れた。いいスクラムだった」と褒めてくれた。3回戦、マスコミなどの戦前の予想を覆し、優勝した福岡電波に圧倒された。最近、2年上級で神のような存在だった進藤孝生さんが「あの時、どうして負けたんだろう。負ける相手でなかった！」と暫く考えてから「秋高は、ガフェ（持久力）がなかった！」と、大笑いした。確かに一時間練習では厳しい試合の連続で足にガタが来ていたのかもしれない。



昭和43年1月　第47回全国大会
2回戦大分舞鶴戦で会心のスクラム。
3番フロントローとして活躍。

2年の時は、工業が圧倒的に強く全国優勝した。それでも、いい試合をしていた。3年の時、全国優勝を狙って練習に励んだが、主将である私の力不足で、監督・後輩を花園に連れて行くことはできなかった。

私は、諦めの悪い男なので、何年も「再試合の夢」を見たり、「花園の本戦まで時間がない、練習しないといけない」とあせったり、ラグビーをしたことを後悔したりした。「よき敗者たれ！」の言葉をもっと早く知りたかったものだ。

年を重ねるごとに、たった3年間だったが、よき先輩後輩に恵まれた秋高生だったことに感謝している。授業中よく居眠りをしても、休み時間の15分に凝縮して教えてくれる優秀な友達がいた事など思い出される。

現在、男鹿市長として

挨拶をする時に冒頭で「ナマハゲの里、男鹿市長の菅原広二です」と、必ず言うようにしている。男鹿を読めない人が結構いるし、ナマハゲは秋田県全体でやっている行事だと思っている人が多い。

私は男鹿が好きで郷土愛だけは誰にも負けない。そして、この素晴らしい魅力のある男鹿を発信し、多くの人に訪ねていただき、幸せになって貰いたい。そのことによって市民が幸せになると思っている。

男鹿は「景色よし、食よし、ナマハゲよし」。しかし「一番いいのはおもてなしの心」と言われるようになりたい。男鹿の美しい景観は大自然が創ったもの。男鹿のナマハゲは、親祖先が伝えてくれた。そして、今を生きる私たちは子々孫々に、何かを遺していきたい。それが「なまはげの里フィロソフィ」だと思っている。

「ナマハゲは、鬼ではなく神である！」私たちを何時もお山の上から見守ってくれている。「悪いことはするな！誠実に生きろ！」と、人間としての原点を諭してくれる。

これは、秋高ラグビー部での教えに似ている。「ラグビーは、人を創るスポーツ」であり、審判が見ていなくても「ルールは自分が守る」というものである。このことは「誰が見ていなくても悪いことはしない」という「ナマハゲの教え」と同じである。

「三つ子の魂百まで」幼児から小学校・中学校まで人間力（非認知能力）を高めていきたい。「優しさ・思いやり・明るさ・誠実さ・忍耐力」など、一生使える非認知能力が大事である。

子どもたちだけでなく、市民にも広めていき、郷土愛をもった、幸せな男鹿市民になって貰いたいと願うこの頃である。



すがわら・こうじ/男鹿市長。男鹿市生まれ。日本大学理工学部卒。株式会社寒風・代表取締役副社長、秋田県議会議員を経て、2017年4月より現職（3期目）。脇本中学在学中は相撲部に所属し、全県選抜相撲大会個人優勝。秋田高校ラグビー部では1年時に花園に出場。3年時はキャプテンとしてチームを牽引。現在は市長として「ふるさと男鹿」の発展のため日々奮闘している。